

本〈0〉と弁別する図式を提案し、縦横に操作する。

侵略や暴政を前に、安易にニヒリズムに浸る余裕なき韓半島の道徳と、天災を忍ぶ受け身の日本列島の虚無。こうした図式や、時に強引な〈2・1・0〉の操作の細部には異論も多々ある。「もの」や「こころ」の位置づけには、既存の幾多の思考体系との対決がさらに必要とされることは言を俟たない。

だが〈2・1・0〉は現在のあまりに訓詁学的に細分化された、日本における東洋思想史研究への挑戦である。中国原産の文明原理〈2〉を換骨奪胎するのが日本の受容〈0〉に典型的な相対化だが、韓国では逆に、中国の文明原理を徹底的に骨肉化する文化的構想力〈1〉(金容沃)が顕著である。

著者は、そうした朝鮮思想史の「血みどろの」活力に魅了される反面、こうした当事者意識に欠け、内在的理解とは無縁な日本の学会の内弁慶に、不充足感を募らるとともに、その「巨大で深遠な〈0〉」の無に気づき得ない朝鮮にも不満を感じてきた。小倉は三島由紀夫の自刃までも、自己を無に帰せしめることで虚構の純粋性を保全する倒錯と読み解く。あるいは大胆にすぎ、内実との乖離すら懸念される〈2・1・0〉の提案だが、そこには、いかに切実な希望が託されているのだろうか。(以下次号)

連載 127
〈2・1・0〉は東アジア社会の相互依存と相互不信とを読み解く普遍的鍵となるか(中)

小倉紀蔵著『創造する東アジア——文明・文化・ニヒリズム』(春秋社 本体四〇〇〇円)を読む

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

(承前)だが本書で小倉紀蔵が注目するのは、民族的同一性という文化的符牒が、対外的な差異性を主張するための政治的虚構として現実的效果を発揮する、という事実である。そこで問題となるのが文化や文明への自意識と、それを拒絶するニヒリズムの問い直しである(ニヒリズムについては、ドストエフスキーの『悪霊』と、ニーチェの「永劫回帰」あるいは万物流転を説く「暖風」が巧みに援用されている。だがこれについては、「距離」「速度」「加速度」の審級の先に「躍度」を設定して藤原定家や道元を読もうとする第11章も含め、将来、さらに別の著作での展開を所望したい)。

神から火を盗んで、人類は文明をもった。プロメテウスのこの神話は何を意味するのか。小倉はのっぺらぼうの世界から「火」が分節され、世界が複数性を宿す契機emergenceを「文明」〈2〉と名づけ、それが型に嵌って成立する特殊な人為環境を「文化」〈1〉と再定義する。と同時にその根底に横たわる虚無〈0〉をも直視する。この構想の裏に井筒俊彦の「東洋哲学」の変奏をみるのは容易い。小倉はそのうえで東アジア世界を、普遍的文明を志向する中国〈2〉、文化の嫡統意識により中華を超えようとする韓国〈1〉、その傍らでニヒリズムへの回帰によって差異化をはかる日